

虹

日々を見つめ歌に託す



創作のために記したノートを見直す島さん＝黒部市内

⑮ 怖がりな新人歌人の転機

トースター開けたら昨日のトーストが入ったままでゆっくり閉じる

気まずさとユーモアが入り混じる短歌だ。昨日食べるはずだったパンを発見したら、やるべきことはいろいろあるはず。でも、この作中主体はとりあえず見なかったことにする。決断を先送りにして、トースターの中に昨日と今日を閉じ込める。黒部市の島楓果さん(23)が詠んだ。

春のパンまつりのシールがキッチンの片隅で二度目の春を知る

忘れられた存在に向ける優しさと、空白の時間に漂う思いが垣間見える一首だ。

これらの歌は、歌集を出していない新人歌人を対象にしたコンクールに寄せた。鋭い観察力が選者の目にとまり、歌集刊行の機会を勝ち取った。選者を務めた歌人、木下龍也さんは「むきだしの自分とむきだしの世界が色濃く存在している」と評する。

高校を中退し、そのまま無職。先が見えずにいた島さんはこのコンクールに賭けた。「昨日のトースト」のような膠着した状態から抜け出そうとした。「ここからちょっとずつ。次につなげていけたら」。真っ黒な長い髪をかき上げる。

◇

元々病弱だったが、中学校からさらに調子が悪くなった。級友は皆優しく接してくれたが、どうも気疲れする。周りに合わせようと、よそ行きの自分を演じていた。帰宅して緊張感がほどけると、力が抜けた。家に着いた瞬間に気を失うこともあった。病院でも理由は判然としない。1学期は頑張れるが、2学期以降には体力も精神力も細る。3年生になると、ほぼ不登校になった。

高校もやはりうまくいかない。他人の気持ちを想像しすぎて分からない。教室を移動する際に、活発な女子生徒が「行こうよ」と言っている、自分にも声を掛けられている気がしない。途中まで一緒にいても、確信を持たずに保健室に逃げ込んだ。

気を失う回数も増えた。床にぶつけた腕があざだらけになった。学校ではずっと緊張状態。楽しいなんて思ったことはなかった。あと少し休んだら留年が確定する。歯を食いしばって学校に行こうとしていたが、母の英子さん(59)から退学を勧められた。1年生の夏休みの登校日を最後に、制服に袖を通すことはなくなった。

母は「高校は大事。親なら行かせたい。

でも、この人生は娘の人生。無理をさせて自殺でもされたら…。とにかく生きてるだけでよかった」と振り返る。

◇

短歌と出会ったのは、退学した年の冬だった。きっかけは、親世代が熱狂したシンガーソングライター、尾崎豊だった。

憧れのアイドルグループ「V6」が出演するバラエティ番組の動画は、鬱屈とした日々の癒やしだった。そこに尾崎のヒット曲を替え歌にする芸人が登場していた。「盗んだバイクを買わされる」という不謹慎な替え歌を経由して、本物、が熱唱する青春の歌を愛聴するようになった。

誰のものか分からなかったが、尾崎の著書が自宅の本棚にあった。小学校の時に不登校だった日々が綴られていた。親近感を覚え、もっと知りたくなった。調べてみると、石川啄木が好きだったらしい。



「ハマヒルガオ」西治子

啄木の『一握の砂』という歌集を読んだ。短歌は短い。小説ほど集中力を要しない。韻律が染み入り、意外に分かりやすい。自分でも作ってみたいと思った。当時詠んだのは、少し牧歌的で「定年後に作るような歌」だった。短歌雑誌の公募に応募してみたが、引っかかることはなかった。

3年ほどして歌を詠むのがつらくなった。変化のない環境では、歌題は生きる苦しきの中にしか見いだせなかった。

夜遅くに寝て、昼前に起きる。外出は母の買い物の同伴や通院、散歩くらい。読書以外に何をやるわけでもない。不安に駆られ、自分を責める日々だ。死も口にした。

高校で使うはずだった国語の便覧で、種田山頭火の存在を知った。<どうしよう

もないわたしが歩いてる>などで知られる漂泊の俳人だ。その日記をスマホで読んだ。最初は当日の日付の箇所を読むのが日課だった。次第に翌日の日付分にも目線が移った。自分の明日と、山頭火の明日を比べてみたくなった。「その先も、その先も知りたい」と、少し未来を生きてみたいと思った。

日記には自由律俳句が添えてあった。なんでもない日々と素朴な感情が凝縮されている。短歌でもできる気がした。

2020年、「あたらしい歌集選考会」という初のコンクール開催を知った。もし選ばれたら、歌集を出版してもらえる。大学に行った同級生が就職活動を始めようとする時期だった。皆が社会に出るのに、自分は何一つ進まない。そんな状況を変えたかった。

山頭火が全国を旅しながら日記を綴ったのに対し、島さんは限られた空間で日々を見つめ続け、言葉に託した。

家にいてただ息をしているだけの自分を罪人みたいに思う

進学も就職もしていない。家族以外には迷惑はかけていなくても、どうしても罪悪感を覚える。そんな焦燥を率直に表現した。なんだか以前作った短歌とは違っている気がした。前は悲しいことを悲しいと書いてただけだ。でも、今は苦境を俯瞰できてくる。不思議と手応えがあった。

しかし、規定の100首が出そろると、急に怖くなった。万が一選ばれてしまうと、これまでの生活が変わるかもしれない。外に引きずり出され、視線にさらされる。新しい世界に対応できる自信がなかった。

気が変わった。「やっぱり出さない」と言った。すると、母が珍しく声を荒げた。

「やってみないと分からないんだから」。めったに怒らない母の怒声にひるんだ。

母は当時を振り返る。「親ばかかもしれないけど才能はある。1人でも認めてくれたら、娘の力になる気がしました」

応募は締め切り当日の消印が有効だった。営業終了間際の郵便局に滑り込んだ。

◇

選出の知らせを受けた。母は「よかったね」と素っ気なかった。怒られたのはなんだったのかと拍子抜けしたが、母は「辛い時間は無駄じゃなかった」と内心喜んでた。

選考会を主催したナナロク社社長で編集者の村井光男さん(45)は「身の回りを題材にする生活詠はこれまでもたくさんあった。でも、島さんの歌に触れ、まだ新しい生活詠があり得るのかと驚いた」と言う。

歌集を作るために、さらに歌を加えることになった。村井さんには、そのやり取りも印象的だった。助詞など細かな修正を提案すると、島さんは応じずに、その歌を落とした。「直せば歌は良くなるかもしれない。でも、そうすると実感とずれてしまうんでしょね。歌人としての明確な姿勢は、編集者としては頼もしかった」

歌集を締めくくったのは、こんな歌だ。

優しさをもってすべてに接すればすべてのものは優しさをもつ

「戦争を起こす人がいたり、犯罪があったり。現実が厳しいのは分かっています。でも、私が怖がっていた世界や人にはそうじゃない部分もあると信じたい」と島さん。この歌の下句「すべてのものは優しさをもつ」を歌集のタイトルにした。他者を信じる信念と希望を託した。

予想していた通り、歌集が出たことで新しい風が吹いてきた。ラジオで歌が紹介された。歌集を手にした文芸誌の編集者から、エッセー執筆の依頼があった。第2歌集刊行の話も持ち上がっている。変化の兆しに緊張はするが、思っていたより怖くはない。次は自分なりに富山を詠む。慣れ親しんだ富山弁も取り入れる。一步、一步。自分の世界を少しずつ広げる。深めてゆく。

短歌を詠む時、島さんの頭にはいくつかのイメージが同時に浮かぶそうです。「これだ」と思ったものを瞬間的に選び、歌の形にします。選び損ねたものは、あっという間に消え去るとか。まさに賭けですね。暑い夏には、島さんのこんな歌をどうぞ。猫が飛び出てきて母は助手席のわたしにソフトクリーム投げる。ヒヤッとしますね。



「虹」第7巻 発売中

最新刊の第7巻「虹 補助輪をはずした日の風」は、北日本新聞連載の121～140回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたまをエピソードや、この紙面についてのご意見・ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50

北日本新聞社西部本社「虹」係

FAX 0766-25-7773

mail niji@kitanippon.jp

次回掲載は8月1日(月)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作/北日本新聞社
メディアビジネス局